群教セ	G05 － 04
	令4.281集
	音楽－中

他者と協働して主体的によりよい表現を追求できる生徒の育成

――音楽表現を創意工夫するためのＩＣＴの活用を通して――

特別研修員　羽鳥　文仁

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

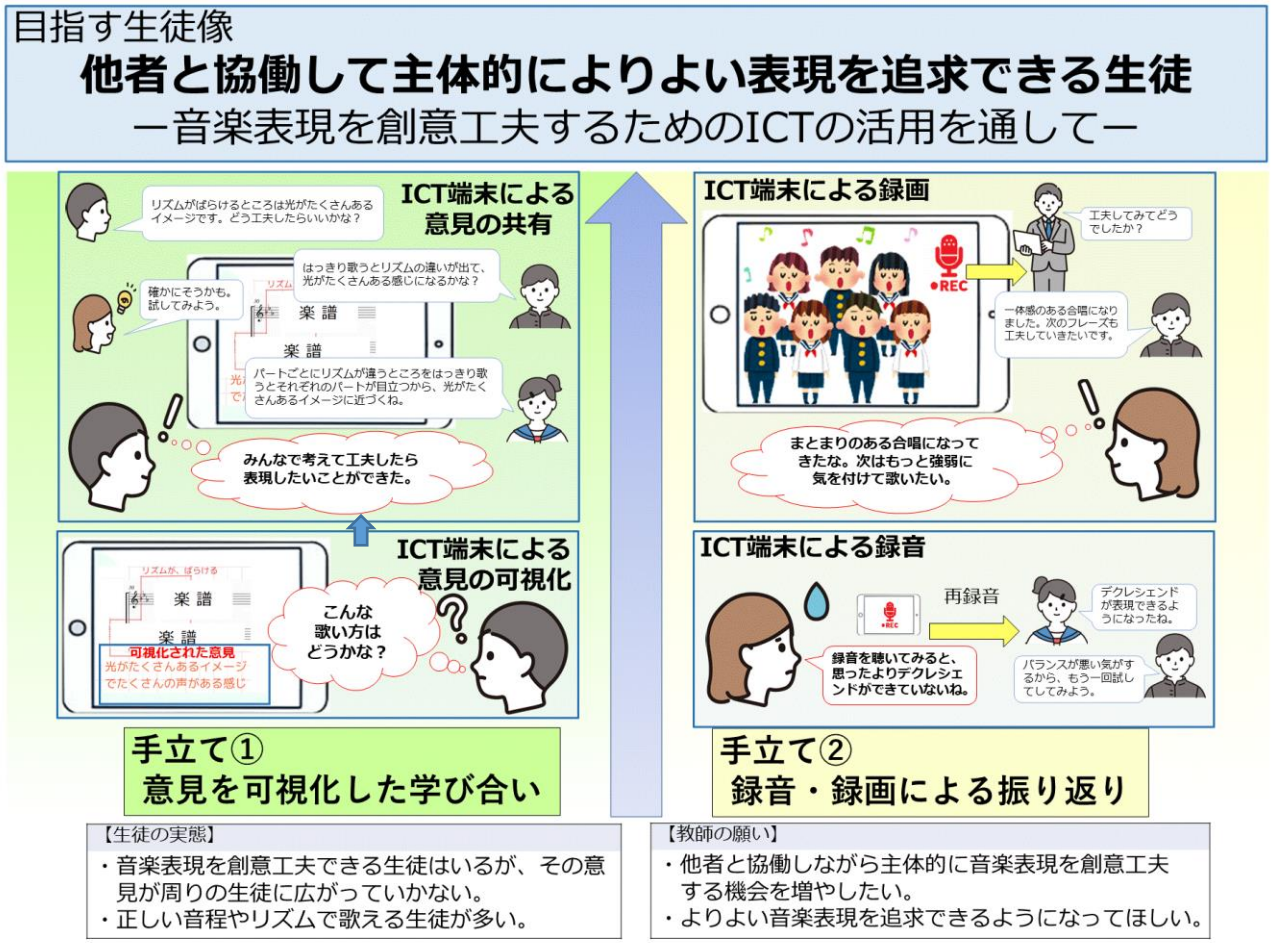
令和４年度の学校教育の指針（群馬県教育委員会）では、「他者と協働する中で、言葉で表したことと音や音楽との関わりが捉えられるよう、様々な表現で試したり、音楽を聴き返したりする活動を設定しましょう。」とあり、様々な表現を試すことや音楽を聴き返すことの重要性が指摘されている。

研究協力校の生徒の多くは、楽しみながら表現活動に取り組んでいる。しかし、音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりできる生徒は少なく、学校教育の指針で重要視されている、様々な表現を試すことや音楽を聴き返すことが主体的にできていないと考えられる。

そこで、音楽的な見方・考え方を働かせ、主体的に表現を創意工夫することができるよう、曲想と音楽の構造との関わりについて理解したり、表したい音楽表現について思いや意図をもつことを促したり、自分の声を客観的に捉え、課題に対する解決策を考えたりするためにＩＣＴの活用を重視することとし、上記のとおり主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

生徒が他者と協働して主体的によりよい表現を追求していくために、ＩＣＴを活用して意見を可視化した学び合いの場を設ける。また、自分たちの演奏を振り返り、よりよい表現を追求するためにＩＣＴを活用して録音や録画を行う。

手立て１　ＩＣＴを活用した、意見を可視化した学び合い

まず、クラウド上に掲載されている楽譜を見ながら、音楽表現を創意工夫したい箇所に個人の意見を書き込む。次に、可視化された他者の意見を見ながらグループで工夫を考えていき、グループで出た意見を基に発表用の楽譜に書き込みをする。最後に全体共有をしながら、音楽表現を創意工夫したい箇所をまとめていく。

手立て２　ＩＣＴを活用した、録音や録画による振り返り

グループ活動で出た意見を基にして、歌唱しながら試す際には、録音や録画をしないと自分たちの歌を客観的に振り返ることは困難である。よりよい表現を追求するために、録音や録画をすることで、自分たちの考えた工夫が表現できているかということや、更に工夫したい箇所があるか等を客観的に振り返ることができるようにする。

全員の意見を見ることができるＩＣＴの利点を生かして円滑に学び合いをしたり、録音や録画をしてすぐに演奏を聴き直したり見直したりすることで、実際に歌唱する時間を長く確保することができる。歌唱をしてみると更に音楽表現を創意工夫したいところが見付かることもあり、他者と協働する中で、様々な音楽表現を試したり、聴き返したりする活動を設定することで、よりよい表現を追求できる生徒の育成を目指していく。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　ＩＣＴを活用して、様々な可視化された意見に触れながら表現の工夫を考えたことで、他者の考えを参考にしながら、表現してみたい思いや意図を更に深めながら創意工夫している生徒の姿が見られた。（手立て１）

○　課題解決する場面の楽譜を抜粋し、端末上で共有したことで、各パートでリズムの違う箇所が見やすくなったり、旋律の流れが見やすくなったりした。その結果、リズムがずれている箇所は最初の言葉をはっきり歌ったり、旋律が下降しているところはデクレシェンドをつけたりして他者と協働しながら音楽表現の創意工夫をすることができた。（手立て１）

○　ＩＣＴを活用して録音を聴き直したり録画を見直したりすることが、よりよい表現を追求するために有効に働くことが明らかになった。生徒の振り返りの中で「録画や録音したものを聴くと、強弱や気持ちを歌にすることは難しいことが改めて分かりました」という記述があった。試行錯誤した成果を確かめながら取り組めるだけでなく、課題の再発見にもつながり、必要感をもってよりよい表現を追求する機会が生まれていた。（手立て２）

○　教師が生徒の歌唱を録音や録画するだけでなく、生徒同士でも録音や録画をしたことで、端末の録音・録画機能で確認しながら表現の工夫ができていた。工夫を考えた部分の変容を感じられたことが、主体的に音楽表現を創意工夫することにつながっていた。（手立て２）

２　課題

○　ＩＣＴを使用することにより、他者の意見を瞬時に見ることができ、自分の考えを広げやすくなるが、思考を深めていくためには「なぜそのように考えたのか」を問い掛けていく必要があると感じた。教師だけでなく周りの生徒同士でも根拠を問い掛けていくことができると、知覚と感受を結び付けながら思考を深めることにつながると感じた。

実践例

１　題材名　曲想やパートの役割を生かして音楽表現を工夫しよう（第１学年・２学期）
　　教材名　「COSMOS」（ミマス　作詞・作曲／富澤裕　編曲）

２　本題材について

本題材は、「COSMOS」を混声三部合唱することで、曲想やパートの役割を生かした音楽表現を創意工夫したり、音楽の構造についての理解を深めて表現したいイメージを膨らませたりする学習である。中学校に入学して初めて混声三部合唱に取り組むのにふさわしい難易度であり、歌詞が表す情景をイメージしたり、曲の世界観に入ったりしやすい合唱曲である。

本題材に取り組む生徒は、昨今の社会情勢により、合唱曲に取り組んできた経験が浅く、教師から言われたとおりに強弱を変化させたり、フレーズを捉えたりしているのが現状である。教師としては、他者と協働しながらよりよい表現を追求できるようになってほしいという思いをもっている。そのために、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりを知覚し、表現したいイメージを膨らませることで、自分で音楽表現を創意工夫したという達成感を味わったり、みんなで合わせたときの充実感や気持ちの高まりを実感できたりするようになってほしいと考えている。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1)　曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解するとともに、創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付ける。（知識及び技能） (2)　強弱、テクスチュア、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、歌唱表現を創意工夫する。（思考力、判断力、表現力等） (3)　強弱、テクスチュア、構成が生み出す曲想に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むとともに三部合唱の響きに親しむ。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)　知識・技能 ①　曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解している。 ②　創意工夫を生かした音楽表現をするために、全体の響きや各声部の声を聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付け，歌唱で表している。 (2)　思考・判断・表現 ①　強弱、テクスチュア、構成を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，どのように歌うかについて思いや意図をもっている。 (3)　主体的に学習に取り組む態度 ①　強弱、テクスチュア、構成が生み出す曲想に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・ソプラノ、アルト、男声のパートに分かれて、パートの役割を確認しながら歌う。
追求する	第２時	・曲の雰囲気が変わるところを見付けて、クラウド上の楽譜を使って場面分けをする。
	第３時	・歌詞の内容を手掛かりに、表現したいイメージを膨らませる。
	第４時	・三つの楽節をそれぞれ歌い、曲調が変化していることを知る。 ・一つ目の場面について、他の場面と比べた際の特徴を見付け、表現を工夫して歌う。
	第５時	・二つ目の場面について、他の場面と比べた際の特徴を見付け、表現を工夫して歌う。
	第６時	・三つ目の場面について、他の場面と比べた際の特徴を見付け、表現を工夫して歌う。
	第７時	・その他の場面について、特徴を見付け、全体の流れを意識して歌う。
まとめる	第８時	・これまでの学習を生かして、合唱をする。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全８時間計画の第６時に当たる。生徒は前時までに三つの楽節の二つ目までの音楽表現を探る活動をしてきている。本時は、三つ目の楽節について、他者と協働して主体的に音楽表現を創意工夫し、よりよい表現を追求できるようにするために以下の手立てを取り入れた。

手立て１　ＩＣＴを活用した、意見を可視化した学び合い

展開の中盤でグループに分かれて、可視化された他者の意見を見ながら意見交流をしていく。展開の終盤では可視化された意見を全体で共有しながら、音楽表現を創意工夫したいところをまとめていく。

手立て２　ＩＣＴを活用した、録音や録画による振り返り

歌唱を録音・録画し、工夫が表現できているかということや、更に工夫したい箇所があるか等を客観的に振り返ることで、よりよい表現を追求できるようにする。

４　授業の実際

(1)　手立て１「ＩＣＴを活用した、意見を可視化した学び合い」について

本時の導入では、26～33小節目までの強弱とテクスチュアの読み取りを行った。次に、強弱とテクスチュアを基に、音楽表現を創意工夫する箇所を個人で考えてクラウド上の楽譜に書き込みをした（図１）。抽出した生徒は「最後の部分をささやくように歌う」という意見を書き込み、意見の可視化をしていた。

図１　書き込みをしている様子

展開においてはソプラノ、アルト、男声の各パートが二人ずつ集まって、どのように歌うかについての考えや、音楽表現を創意工夫するポイントを話し合うグループ活動を行った（図２）。この活動では、個々の活動でまとめたクラウド上の楽譜を見てもらいながら、自分の意見を表現し、伝え合っている様子が見られた。可視化された意見の中から共通するものを確認したり、異なる視点で工夫を考えた生徒に質問をしたりする様子が見られた。意見をすぐに見ることができ、意見共有を円滑に進めることができた。

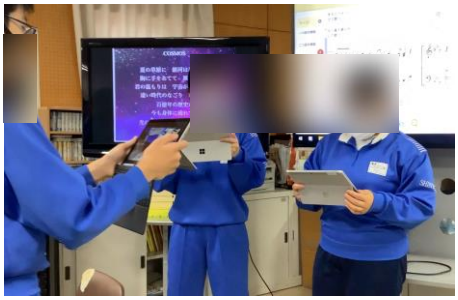


図２　相手の意見を可視化した学び合い

多くのグループが画面に楽譜の一部分を拡大し、リズムやテクスチュアに着目しながら話合いをしていた（図３）。意見を可視化して共有したことで、抽出した生徒は「リズムがずれている箇所は最初の言葉をはっきり歌って光の声がたくさんあるイメージにしたい」と思いや意図を膨らませていた。他のグループでも、旋律が下降しているところはデクレシェンドにするというような、楽譜に書かれていることを基にした話合いをすることができていた。抽出した生徒はグループの話合いを通して、曲の最後の部分にデクレシェンドの記号を譜面に書き加えていた。

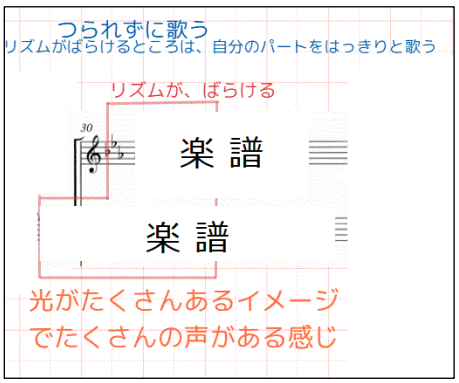


図３　楽譜の一部分を拡大した様子

展開の終盤では、グループで出た意見をクラウド上の楽譜に書き込み、その楽譜を見ながら全体共有を行った。様々な意見に触れることができたため、他の生徒の意見を参考にしながら、自分の楽譜に工夫を書き込む生徒の様子も見られた。

(2)　手立て２「ＩＣＴを活用した、録音や録画による振り返り」について

展開においては、ＩＣＴを活用して意見の共有が円滑になったことで、どのグループも自分たちの演奏を録音して聴き直す時間を確保することができていた（図４）。聴き直した後には、「アルトはもう少し（音量を）出して大丈夫だと思う」や「最後のデクレシェンドが表現できていない」という会話がグループ内でされていた。もう一度録音をしてみると、音楽表現の創意工夫を考えた部分の変容を感じることができた生徒から、「さっきよりよくなったね」と喜びの声が上がっていた。他のグループでは、歌い出しを強く歌唱できているかや、パートごとにリズムが違う部分が明確に聴こえているかの確認をしたりしていた。

図４　録画による振り返りの様子

終末においては、学級全体の演奏を録画し、自分たちの思いや意図にふさわしい音楽表現ができているかの振り返りを行った（図５）。自分たちの演奏に興味をもちながら真剣に聴いている生徒が多く、本時の成果を振り返っている様子が伝わってきた。聴いた感想を生徒に聞くと、「よく強弱がついていて、言葉の感じもよくなった」という感想を発表していた。

図５　全体録画による振り返りの様子

本時を通しての振り返りには、音楽表現の創意工夫を考えたことで合唱がよりよくなったという意見が見られた（図６）。また、録画を振り返って課題を見付け、よりよい表現を追求していこうとする生徒の振り返りもあった（図７）。

6時間目
一つ目から音楽表現の工夫を考えてきて、強弱や歌い方を意識しながら歌うと曲の雰囲気がよくなったと思いました。

図６　表現の高まりを実感している生徒の振り返り

６時間目
強調するところや工夫をポイントにみんな歌っていたのですごいと思いました。録音を聴くと、私は音が出ないところや出すぎているところなどがあったので曲のイメージをしながら演奏していきたいと思いました。

図７　よりよい表現を目指している生徒の振り返り

５　考察

本時の最初に録画をした演奏と、本時の最後に録画をした演奏とを比較してみると、音楽表現に大きな変化が見られた。本時の展開の始めに個人で音楽表現の創意工夫を考えた段階では、どのように表現をしていくかについて思いを膨らませている生徒は少数だったが、展開の中盤に行った意見を可視化した学び合いに取り組む生徒の様子を見ると、相手の意見に拍手を送ったり、意見を聞いて自分のページに加筆したりする生徒が見られた。「みんなで意見交流ができてよりよい歌になりました」と振り返りに記入している生徒もいたことから、他者と協働して音楽表現の創意工夫を考える活動ができていたことが伺えた。また、どのグループも話合いだけでなく、実際に歌いながら音楽表現を試す時間を確保できており、クラウド上に全員の意見が可視化してあることで、円滑に意見の共有が進んでいた様子が見られた。これらのことから考察すると、相手の意見を可視化した学び合いという手立てが、他者と協働して音楽表現の創意工夫を考えることや、よりよい表現を追求する時間の確保に有効であったと言える。

展開の終盤には、音楽表現の創意工夫をしたいところについての意見がまとまり、どのグループも録音や録画をしている様子が見られた。自分たちの演奏を聴き直してみると、「最後のデクレシェンドが表現できていない」や「アルトはもう少し（音量を）出して大丈夫だと思う」という会話がグループ内でされており、録音や録画による振り返りが課題の再発見につながり、必要感をもってよりよい表現を追求する機会が生まれていたことが明らかになった。グループ活動中に何回も録音や録画に挑戦している生徒が多く、歌い方の調整をしながら、主体的に活動に取り組む様子が見られた。

二つの手立てが有効に働いた結果、本時の終末には強弱変化やパートの役割を全員で意識しながらまとまりのある合唱ができていた。課題としては、意見を可視化しての学び合いで、更に思考を深めていくために「なぜそのように考えたのか」を問い掛けることが必要であったと感じる。

本時の振り返りには、「歌っているところを動画で撮ってもらったら、上手になったなと思いました。最初に歌ったのと最後に歌ったので工夫を加えたという違いを感じました。次の授業では強弱を意識して歌おうと思いました」という振り返りがあった。音楽表現を創意工夫したことにより、表現の高まりを実感することができ、よりよい表現を追求しようとする様子が見られた。